

「中国にみる三輪山神話の系譜―〈苧環の糸〉の風景―」【サマリー】

百田弥栄子

中国の三輪山神話について、私は2008年以来説話・伝承学会の学会誌やシンポジウム等でたびたび発言してきた。「美しい娘の元に夜ごと通い来る男あり。麻糸を通した針を男の衣の裾にそっと刺し、翌朝糸をたどって男の素性を知る。蛇神だった」という『古事記』「崇神天皇」の条で知られる神話である。私はそこで中国の十六の事例を紹介し、「それらは主に雲南省に伝承され、すべてが彝族と彝族系の人々の間に集中して見出すことができる」ことを報告した。

本稿はこれら予備的研究の上に立ち、横田素子氏（内蒙古大学客員教授）と何耀華先生（中国西南民族研究学会の会長）、雲南大学の何大勇氏と「中国三輪山神話研究チーム」を組んで、当該研究所の研究成果（一）としてまとめたものである。幸い一部当該研究所の助成を得て、2011年と2014年に雲南省の「三輪山神話」の土地を訪ねることができた。この二度の現地調査では、昆明市と近郊の楚雄彝族自治州、玉溪市一帯を回った。「曇華山の伝説」や「黒木越と色絡米」「包頭王村の来歴」「瑪賀念」「瑪呵尼」「一眼の土地と一馬の土地の伝説」「阿麼特格」（アマトロ）という七つの事例の伝承地である。

本稿では紙幅の関係で2011年9月に行った楚雄州武定県環州郷での「アマトロ」と昆明市近郊の紫溪山の「包頭王村の来歴」を、現地調査をまじえて報告した。楚雄彝族自治州文化研究所では「包頭王村は漢族の村だ」とそっけなく言われたが、包頭王村は漢族が押し寄せるだけのすばらしい景観だった。「アマトロ」を祀る山頂や包頭王村の廟等でも、村人の伝承への深い信頼と信仰と共に、石神や龍石への信仰や習俗を垣間見ることができた。鉱山を背景にした伝承地で、三輪山神話との古代の時代の交叉を感じたことだった。

なお本稿は擱筆ではなく、今後続くことになる。